第３章　神武天皇と桜井茶臼山古墳

1　畝傍山と神武天皇陵

(1) 神武天皇陵

神武天皇は東征を終えると畝傍山に都を定める。

> （天皇）令して曰く、「我、東征して六年になる。（中略）観れば夫れ畝傍山（うねびやま）の東南の橿原の地は蓋し国の埶区（山のふもとに入り込んだ住むに適した所）か。之に治すべし。　『紀』

神武天皇は畝傍山の東南の地に都を定めたとある。死去すると畝傍山の北、または東北の陵に葬られる。

- 天皇、橿原宮に崩じぬ。畝傍山の東北の陵に葬す。　『紀』
- 畝火（うねび）の白梼原（しらかしはら）宮に座して天下を治める。（中略）御陵は畝火山の北方の白梼の尾の上に在り。　『記』

神武天皇は畝火（畝傍）で天下を治め、死去すると畝火山（畝傍山）の北（または東北）に埋葬されたとある。神武天皇陵は畝傍山の北（または東北）にある。

(2) 畝傍山とは

畝傍山の東北に神武天皇陵がある。正式には「畝傍山東北陵」という。しかしこの陵は八角形の上に円墳がのる八陵円形である。この形式は古墳時代終末期のものである。神武天皇は弥生時代終末、あるいは古墳時代初期の人である。陵が八角形の古墳であるはずはない。

「畝傍山東北陵」について、『奈良県の地名』（平凡社）は次のように説明している。

○「畝傍山東北陵」（現在、橿原市大久保町）

畝傍山の東北麓にあり、神武天皇陵に擬せられている。（中略）平安時代になって、『延喜式』（諸陵寮）に「畝傍山東北陵、在大和国高市郡。兆域東西一町、南北二町。守戸五烟」とあるが、その後、陵の所在地も確かではなくなった。（中略）文久三年（１８６３年）、「みさんざい」と称する現在の地に治定、兆域その他については度々整備拡張が行われ、墳丘を中心に土塁・堀・石柵などをめぐらし、その外側には広い植え込みがされている。

現在の神武天皇陵は江戸時代に治定され、新たに造られたものである。

『記』には、神武天皇陵は「畝火山の北方の白梼の尾の上に在り」とある。陵は尾根の上にある。ところが現在の神武天皇陵（畝傍山東北陵）は平地にある。現在の神武天皇陵は『記』の記述に合わない。

しかも現在の畝傍山には尾根がない。『記』『紀』の記す「畝傍山」とは異なる。「畝傍山」は現在の畝傍山ではないと思われる。

畝傍山は神武天皇の子供達の争いに出てくる。

故、天皇崩じて後、其の庶兄當芸志美美命（たぎしみみのみこと）、其の嫡后（おおきさき）伊須気余理比売（いすけよりひめ）を娶りし時、其の三弟を殺さむとして之を謀る間に、其の御祖（みおや）

伊須気余理比売、患（うれ）い苦しみ、歌を以て其の御子等に知らしめたまいき。歌に曰く、

・狭井河よ　雲立ちわたり　畝火山　木の葉騒ぎぬ　風吹かむとす

・畝火山　昼は雲とい　夕されば　風吹かむとぞ　木の葉騒げる

ここに於いて其の御子聞き知りて驚き、乃ち當芸志美美（たぎしみみ）命を殺さむとする時、神沼河耳（かみぬなかわみみ）命、其の兄神八井耳（かみやいみみ）命に曰く、「汝命、兵を持ち、入りて當芸志美美を殺せ」という。故、兵を持ちて入りて殺さむとせし時、手足わななき、得殺したまわざりき。故、ここに其の弟神沼河耳命、其の兄の持てる兵を乞い取り、入りて當芸志美美を殺す。　『記』

神武天皇は九州に居るとき阿比良比売を娶り、多芸志美美（たぎしみみ）命と岐須美美（きすみみ）命を生んでいる。東征の後に、伊須気余理比売命を后にして三人の子を生む。日子八井命、神八井耳命、神沼河耳命である。

神武天皇が死去すると、長男の多芸志美美命は神武天皇（父）の后である伊須気余理比売命を娶ろうとする。

伊須気余理比売命は美和（三輪山、大神（おおみわ）神社）の大物主神と勢夜陀多良（せやだたら）比売との間に生まれた姫である。三輪山の勢力であろう。伊須気余理比売命の家は『記』に「狭井河の上に在り」とある。狭井河は三輪山の麓にある川である。大三輪神社のすぐ北に狭井神社がある。『延喜式』にも、城上郡に「狭井座大神荒魂神社」とある。

伊須気余理比売は狭井河から歌を詠んでいる。その歌に「畝火山は木の葉が騒ぐ」とある。「木の葉が騒ぐ」とは多芸志美美命がお前たち三人を殺そうとたくらんでいるという意味である。

畝火山は神武天皇が天下を治めたところである。神武天皇の墓も畝傍山にある。神武天皇が死去した後は長男である多芸志美美命がそこを継承しているはずである。多藝志美美命は畝傍山に住んでいると思われる。「畝傍山が騒がし

い」とは畝傍山に居る多芸志美美命がお前達を殺そうとしているという意味である。

「畝火山は昼は雲とい」とある。「雲とい」とは岩波書店の『古事記』の頭注に「雲が流れ動く」とある。

ところが畝傍山は平野にある。１９９ｍの小さな山である。三輪山から見ると後ろに１０００ｍもある金剛山（葛城山）がある。そのため低い畝傍山に雲がかかることはない。「畝傍山に雲が流れ動く」という描写は今の畝傍山では起こり得ない。

また畝傍山は三輪山からは遠すぎて「木の葉が騒ぐ」というような状況は観察できない。

このように歌の内容からみても「畝傍山」は現在の畝傍山ではないと思われる。畝傍山はもっと三輪山に近いところにあるのではないだろうか。

伊須気余理比売の居所である狭井は三輪山の麓にある。東は三輪山である。こちらには畝傍山はない。西は平地である。その先に畝傍山があるが、前述のように歌に合うような畝傍山はない。北は平地が続き山はない。山があるのは南である。南には近くに吉野の山々が連なる。「雲が流れ動く」という情景はしばしば観察される。畝火山は三輪山の南にあるのであろう。

2　磐余と桜井茶臼山古墳

(1) 磐余と磐余彦

磐余（いわれ）は奈良県桜井市の鳥見山の北、および西側の一帯をいう。神武天皇の名前は『記』に「神倭伊波禮毘古（かむやまとイワレひこ）」とある。『紀』にも「神日本磐余彦火火出見天皇」とあり、どちらも「イワレ彦」である。

古代には名前に地名を付けることが多い。神武天皇は磐余に住んでいたので「磐余彦」というのであろう。

神武天皇の幼少の名前は「狭野尊」である。東征の後に、天下を治めて磐余彦といわれるようになる。

> 先ず彦五瀬命を生む。次に稲飯命。次に三毛野命。次に狭野命。亦神日本磐余彦尊と号す。狭野と称するのは年少の号なり。後に天下を平定して八洲を治める。故、また号を加えて神日本磐余彦尊と曰う。　　『紀』一書

神武天皇は磐余で天下を治めたので「磐余彦」という。

(2) 畝傍山と鳥見山

神武天皇は「畝傍山の東南の橿原の地で天下を治めた」とある。神武天皇は「畝傍山」で天下を治めている。また「磐余」に住んでいる。

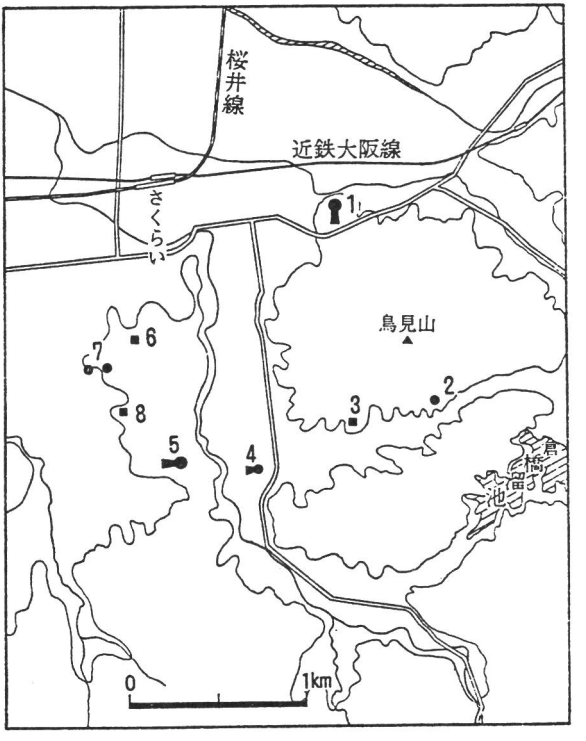
畝傍山は伊須気余理比売の歌から三輪山の南にあると思われる。磐余の地はまさに南にある。「畝傍山」は現在の畝傍山ではなく、磐余の地にあるのではないだろうか。

神武東征の最終地は桜井市外山（とび＝鳥見山）である。そこは磐余である。

神武天皇は「畝傍山」、「磐余」、「外山（鳥見）」に居たことになる。「外山」も「磐余」も「鳥見山」にある。畝傍山は鳥見山であろう。

神武天皇陵は「畝火山の北方の白梼の尾根の上に在り」とある。畝傍山が鳥見山であるとすれば鳥見山の北方に桜井茶臼山古墳がある。尾根を利用して、末端を切断して造った古墳時代初期の古墳である。「畝火山の北方の白梼の尾根の上に在り」という記述と一致する。畝傍山は鳥見山であり、神武天皇陵は桜井茶臼山古墳であろう。

図 13　鳥見山と磐余と桜井茶臼山古墳（『探訪　日本の古墳』より）



桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳と周辺の遺跡
(1 茶臼山古墳，2 舞谷古墳，3 秋殿古墳，4 兜塚古墳，5 メスリ山古墳，6 艸墓古墳，7 安倍文珠院古墳(西・東)，8 谷首古墳)

図 13　鳥見山と磐余と桜井茶臼山古墳

(3) 桜井茶臼山古墳

桜井茶臼山古墳について、『探訪 日本の古墳（西日本編）』（有斐閣選書）は次のように書いている。

□桜井茶臼山古墳

この地域は古代の歴史的地域として知られる磐余地方にあたる。

○墳丘

■ 鳥見山の尾根の一つを利用し、修飾して造作。丘尾切断の前方後円墳。

■ 全長……約２０７ｍ、　後円部径……約１１０ｍ、
前方部幅……約６１ｍ。

■ 柄鏡式の典型的な形

■ 後円部は三段築成、前方部は二段築成の痕跡

■ 葺石……墳丘表面に部分的に存在。

■ 墳頂部……平坦で、截頭円錐状の後円部が考えられている。

■ 墳頂平坦部の径……東西２７.５ｍ、南北３２ｍ
その中に割石を使用して縁どりした方形壇がある。
北辺９.７５ｍ、西辺１２.３ｍの直方形状。その外側に底部穿孔の壺形土器が並べ置かれていた。

○埋葬施設

■ 竪穴式石室

■ 全長６.７５ｍ、幅（中央部）１.１３、北辺１.２８ｍ、南辺９７ｃｍ、高さ１.６ｍ

■ 朱……石室内全面、天井石の表面まで朱彩（酸化鉄）が施されていた。

■ 棚状施設……石室の南北両面の下方に棚状施設

■ 木棺……トガの木

○副葬品

■ 玉杖、玉葉

■硬玉製勾玉
■鏡片、鉄鏃、刀剣破片

このように説明している。桜井茶臼山古墳の特徴をあげると次のようになる。

□桜井茶臼山古墳の年代

寺沢薫氏の「纒向型前方後円墳の築造」（『考古学と技術』同志社大学 考古学シリーズⅣ １９８８年）によれば、桜井茶臼山古墳は布留１式期である。布留１式の年代は寺沢氏の編年表によるとほぼ３００－３３０年ころになる。

神武東征は２５０年－２６５年ころに出発し、6－１０年ぐらいかかっている。その後天下を治めて神武天皇は死去する。墓が造られるのは３００年ころであろう。造営には数年かかる。桜井茶臼山古墳は神武天皇の陵として時期的によく合っている。

□王墓

■玉杖が出土している。玉杖は王位の象徴である。
■玉葉は、中国の皇帝が家臣の死にあたり、与える葬具の一つといわれる。

○桜井茶臼山古墳は王墓であろう。神武天皇の墓にふさわしい。

図 14　桜井茶臼山古墳と玉杖
（『日本の古代遺跡５　奈良中部』（保育社）より）

磐余の首長墓

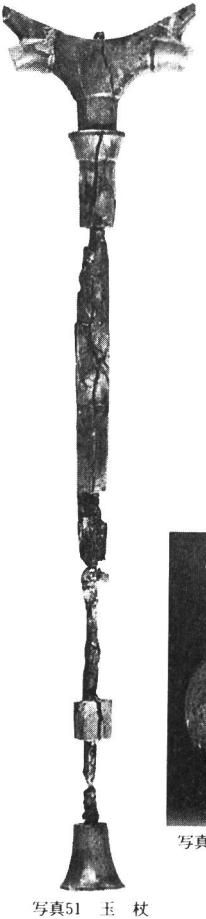


写真51　玉　杖

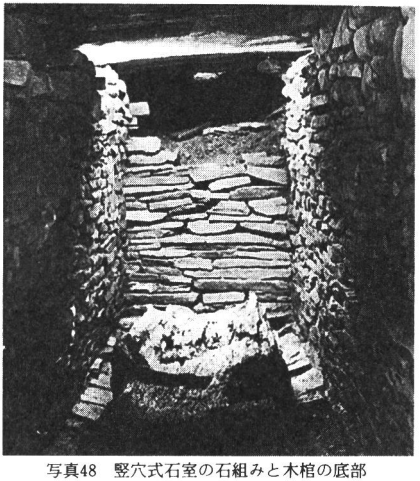


写真48　竪穴式石室の石組みと木棺の底部

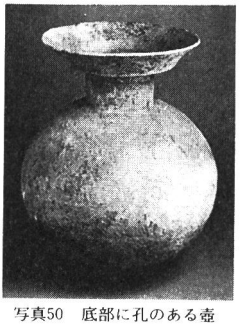


写真50　底部に孔のある壺

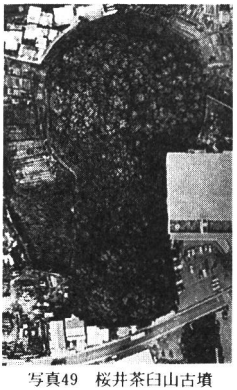


写真49　桜井茶臼山古墳の現状

図 14　桜井茶臼山古墳と玉杖

□三種の神器

■鏡・武器類・勾玉の三種の神器が出土している。

○三種の神器は伊都国の伝統的な祭器である。桜井茶臼山古墳は伊都国王の墓といえる。神武天皇の墓にふさわしい。

桜井茶臼山古墳は『記』『紀』に書かれている神武天皇陵の所在地と一致する。年代も合う。副葬品も伊都国王のものであるといえる。桜井茶臼山古墳は神武天皇陵であろう。

第4章　「東征」の証明（文献より）

1　『新唐書』の神武天皇

(1) 『新唐書』日本伝

『新唐書』日本伝に神武天皇が出てくる。

> 自言、初主號御中主、至彦瀲凡三十二世、皆以尊為號。居筑紫城。彦瀲子神武立。更以天皇為號。徙治大和。次曰綏靖、次安寧、（略）
>
> 『新唐書』
>
> （訳）自ら言う、初めの主は御中主と号す。彦瀲（ひこなぎさ）に至る凡そ三十二世、皆尊を以て號と為す。筑紫城に居す。彦瀲の子神武立つ。更に天皇を以て號と為す。徙（うつ）りて大和に治す。次は綏靖という、次は安寧という、（略）

最初の神は御中主であるという。『古事記』と同じである。『日本書紀』の方はその５代後の国常立尊（国之常立神）からはじまる。

神武天皇は御中主神から数えて凡そ三十二世の彦瀲の子であるという。『記』は御中主神から神武までを次のように書いている。

○別天神五柱　　５代
天之御中主神
高御産巣日神
神産巣日神
宇摩志阿斯訶備比古遲神
天之常立神

○神世七代　　７代

国之常立神

豊雲野神

宇比地邇神、妹須比智邇神

角杙神、妹活杙神

意富斗能地神、妹大斗乃辨神

於母陀流神、妹阿夜訶志古泥神

伊邪那岐神、妹伊邪那美神

○高天原から日向まで

天照大神

天忍穂耳命

天邇邇芸命

天津日高日子穂穂手見命

天津日高日子波限建鵜葺草不合命（ひこなぎさたけふきあえず）

神武天皇

『記』の方は御中主神から彦瀲（天津日高日子波限建鵜葺草不合命）まで１７代である。『新唐書』には「三十二世」とあり、『古事記』よりも詳しい。

国常立神は紀元前２００年頃の人である。衛満に追われて医巫閭山付近から朝鮮半島南部（高天原）へ逃げてくる。（古代史の復元①『倭人のルーツと渤海沿岸』参照）

神武天皇は２６０年頃に東征する。この間は約４６０年ある。『史記』楚世家に「３０世代、７００年」とある。１世代の平均は約２３年である。４６０年は約２０世代になる。

御中主神は国常立尊よりも５代前であるから御中主神から神武天皇までは約２５世代となる。

『新唐書』は「三十二世」と書いているから『新唐書』の方が『記』よりも詳しいことになる。『新唐書』は『記』以外の情報をもとにして書いている。

(2) 『新唐書』と神武東征

『新唐書』によると、彦瀲は筑紫城に居すとある。筑紫の日向である。彦瀲の子の神武天皇が「筑紫城から大和へ徙る」とある。「神武東征」である。

ここには単に「徙（うつ）る」とある。「移住」である。『新唐書』は神武東征が「征討」ではなく「移住」であることを記述している。

『新唐書』は遣唐使の時代である。遣唐使から詳しい情報を得て書いているのであろう。遣唐使は『記』『紀』とは異なる歴史を唐王朝へ伝えている。日本国家が派遣する高官が『記』『紀』以外の歴史を正しいと認識していたのである。奈良時代の高官は神武東征が「移住」であることを正しく認識している。

2　壬申の乱と神武天皇陵

(1) 神武天皇陵への戦勝祈願

天智天皇の死後、天智天皇の子の大友皇子と天武天皇は王位を争う。壬申の乱である。この戦いの中で天武天皇の軍は神武天皇陵に戦勝祈願をする。

> これより先、金綱井（かなつない）に軍（いくさだち）したまう時、高市郡の大領高市縣主（たかいちのあがたぬし）許梅（こめ）はにわかに口を閉じ、ものを言うことができなくなった。三日後、まさに神にかかりて言う、「吾は高市社に居す名は事代主神（ことしろ

ぬしかみ）なり。又、身狭（むさ）社に居す名は生霊神（いくみたまかみ）なり。」という。乃ち之（神意）を顕（あらわ）して曰く、「神日本磐余彦天皇の陵に、馬及び種々の兵器を奉（たてまつ）れ。」という。（中略）故、是を以て、便（ただち）に許梅を遣わして、御陵を祭り拝して因りて馬及び兵器を奉る。　『紀』

壬申の乱は６７２年に起きている。「神日本磐余彦天皇（神武天皇）の陵を祭り拝して馬及び兵器を奉る」とある。神武天皇陵に戦勝祈願している。当時の人々は神武天皇陵がどこにあるかを知っていたのである。

(2) 奈良県桜井市宗像神社

桜井茶臼山古墳の近くに宗像神社がある。現在はやや離れたところにあるが、昔はもっと桜井茶臼山古墳の近くにあったという。『奈良県の地名』（平凡社）は宗像神社について次のように書いている。

□桜井市宗像神社

■鳥見山北麓に鎮座

多紀理毘売命・市寸嶋比売命・田寸津比売命を祀る。

式内宗像神社は『類聚三代格』所収の寛平五年（８９３年）一〇月二九日の太政官符によれば、現福岡県の宗像大社と同神で、氏人高階真人忠峰の祖、高市皇子が神舎を修理したとある。高市皇子は胸形君徳善の娘尼子娘と天武天皇との間に生まれており、天武朝頃に胸形君の一族が本拠地筑前国の氏神を勧請したものと考えられる。また『類聚三代格』元慶五年（８８１年）一〇月一六日の太政官符には「座大和国城上郡登美山」とある。（中略）天武朝より氏人の奉る神宝・園地も多く、高階真人が累代社務をつかさどっていたが、時を経るにしたがって神宝の紛失や祭事の闕怠があったので、しば

しば祟りがあった。（中略）しかし、年を経て神舎は破壊し、氏賤が蕃息して相当の数に及んだ。そこで高階真人忠峰らが、筑前国宗像郡金崎の１６人の賤を良民として調庸を奉らしめ、代わりに当社随近の傜丁を永く修理料にあてるよう官裁を請うたところ、寛平五年一〇月二九日、これらの傜丁を修理料にあて、他役に使用することを禁じ、死闕・老衰・交代の時にも請を待って補充、永く例とするよう定めた。

桜井市の宗像神社は天武朝の頃に勧請され、その後天武天皇の長男である高市皇子が修理したとある。

宗像神社は登美山（鳥見山）の北にあり、神武天皇陵である桜井茶臼山古墳の近くにある。壬申の乱の時、天武天皇の軍は神武天皇陵に戦勝祈願をし、勝利を得ている。宗像神社はそのお礼として建てられたのであろう。天武天皇が建てたと思われる。

高市皇子は天武天皇とともに壬申の乱を戦っている。神武天皇陵に戦勝祈願をしたことも知っているであろう。そのため宗像神社を修理している。

天武天皇は胸形君（宗像君）徳善の娘を娶り長男の高市皇子をもうけている。若いときは宗像地方に居たと思われる。天武天皇の本拠地は宗像か、その近くであろう。

神武天皇は東征の時、菟狭（沖の島、または大島）に立ち寄り戦勝祈願をしている。沖ノ島や大島は宗像神社である。宗像神社に祀られている三女神は天照大神が生んだ神である。神武天皇もまた天照大神の子孫である。神武天皇と宗像神社は同族である。

天武天皇は胸形君の娘を娶っている。天武天皇は宗像神社と関係が深い。神武天皇陵に宗像神社を建てたのはこのような関係からであろう。

桜井茶臼山古墳が神武天皇陵であることは天武天皇も、高市皇子も知っていたのである。

3　伊勢・志摩の地名の移動

(1) 伊勢と天孫降臨

三重県に伊勢・志摩がある。伊勢には伊勢神宮があり、伊勢神宮には五十鈴川が流れている。

ところが伊勢や五十鈴川は天孫降臨に出てくる。

> 「天照大神の子、今降り行くと聞く。故、迎え奉りて相待つ。吾が名は猨田彦（さるたひこ）大神なり」という。（中略）（猨田彦また）対えて曰く、「天神の子は則ち筑紫の日向の高千穂の槵觸峯（くしふるみね）に到るべし。吾は伊勢の狭長田の五十鈴川の川上に到るべし。」という。　『紀』第九段一書第一

伊勢と五十鈴川が出てくる。従来は三重県の伊勢であり、伊勢神宮を流れる五十鈴川であるといわれてきた。

しかし、天孫降臨は北部九州の出来事である。天神（天族）は博多湾に上陸し、筑紫の日向（福岡市西区）の吉武高木遺跡に住み着いている。

それを迎えた猨田彦は伊勢の狭長田の五十鈴川の川上に「移り住んだ」とある。猨田彦は博多湾沿岸に住んでいたのであろう。天族が渡来してきたので土地を譲り、伊勢へ移っている。渡来人（天族）に追われて伊勢へ逃げたのであろう。

博多湾に住んでいた猨田彦が三重県の伊勢まで逃げるはずはない。当時は弥生時代前期末であり、丸木舟の時代である。北部九州から伊勢まではあまりにも遠い。しかも三重県の伊勢まで逃げて行く理由がない。当時はまだ人口は少なく住む土地はいくらでもある。伊勢は三重県の伊勢ではなく、福岡市西区（天孫降臨の地）の近くにあるのではないだろうか。

(2) 伊勢と伊都国

『桓檀古記』に次の記事がある。

> 日本舊有伊国。亦曰伊勢。與倭同隣。伊都国在筑紫、亦即日向国。自是以東属於倭。　『桓檀古記』大震国本記
> （訳）日本は舊（もと）伊国有り。亦、伊勢という。倭と同隣す。伊都国は筑紫に在り、亦即ち日向国なり。是れより以東は倭に属す。

伊都国のことが書かれている。伊都国は伊国ともいい、伊勢ともいうとある。伊都国は「伊勢」である。

『記』『紀』にも、伊都国を「伊勢」と呼ぶ歌がある。神武天皇が丹生の本営に居たときの歌である。

> 神風の　伊勢の海の　大石にや　い這い廻る　細螺（しただみ）の　細螺の　吾子よ　吾子よ　細螺の　い這い廻り　撃ちてし止まむ　撃ちてし止まむ　『紀』

『記』の方では同じ歌が登美毘古を撃つときに出てくる。

ここに「伊勢の海」とある。神武天皇が居た「伊都国の海」のことである。神武東征の出発地である日向（伊都国）を『記』『紀』は「伊勢」と書いている。

『紀』は、また伊都国が伊蘇（いそ）ともいわれたと書いている。

> 筑紫の伊覩縣主（いとのあがたぬし）の祖五十迹手（いとて）、天皇の行（いでま）すを聞きて（中略）穴門の引嶋に参り迎える。（中

略）故、時人、五十迹手の本土（もとくに）を号して伊蘇国（いそ）という。　『紀』

五十迹手は伊覩縣主である。伊都国の主（王）である。五十迹手の本土である伊都国を伊蘇国と号したとある。伊都国は伊蘇国とも呼ばれた。

伊蘇（イソ）と伊勢（イセ）は音通である。伊都国は伊蘇とも、伊勢ともいわれたのである。

猨田彦が天族に博多湾沿岸の地を譲り、「伊勢へ移った」とあるのは伊都国へ行ったのである。伊勢（伊都国）には五十鈴川が流れている。五十鈴川はおそらく今の瑞梅寺川か、雷山川であろう。

図 15　糸島（伊都国）と瑞梅寺川

（『北部九州の古代文化』森貞次郎（明文社）より）

(3) 伊勢・志摩と伊都・斯馬

三重県の伊勢は伊都国の伊勢から付けられた地名であると思われる。

伊勢と志摩は「伊勢・志摩」とセットで呼ばれる。「志摩」も伊都国の近くにあり、伊勢とともに地名が移ったのではないだろうか。

『三国志』倭人伝に「遠絶な其の餘の旁国」として２１国が書かれている。その最初に「斯馬（しま）国」がある。福岡県糸島郡志摩町である。志摩町は「しま」であり、弥生時代には「島」であった。

図 15　糸島（伊都国）と瑞梅寺川　（参照）

点線が当時の島の海岸線である。

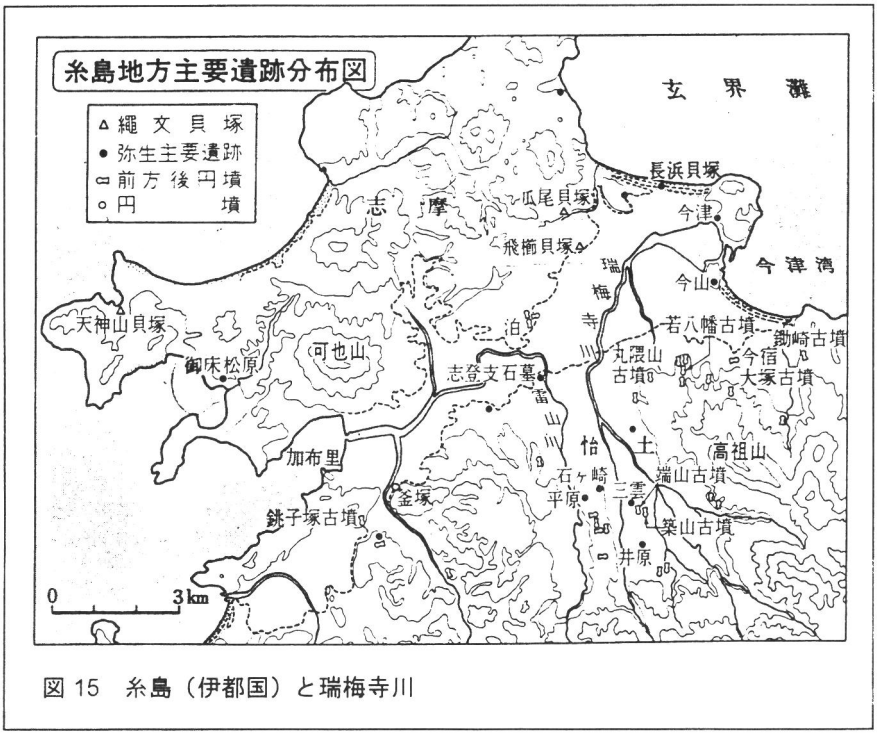


図 15　糸島（伊都国）と瑞梅寺川

志摩の南に伊都国がある。伊都国（いと）と島（しま）を合わせると「いと・しま」である。現在も糸島郡（いとしま）という。

伊都国は伊勢であり、斯馬と合わせると「いせ・しま」になる。「伊勢（伊都）・斯馬（いせ・しま）」が三重県に移り、「伊勢・志摩」になったのであろう。

『宮下文書』に次のような記述がある。神武東征の時、神武天皇の父（神皇）は健在であり、伊勢・尾張から関東・東北まで巡幸している。佐野王命（神武天皇）は五瀬命が死去したことを神皇に伝える。

佐野王命（神武天皇）、すなわち海上より急使を派し、東国巡幸中の神皇を初め、各地に巡撫ましまします皇族諸官神に事の由を報せしむ。是より先、神皇は本島に巡幸ましまして、先ず東北の諸大国諸区国初め、島々の土蜘蛛・愛野人・農賊等を言趣和平（ことむけやわ）しけるに由り、各地を巡幸ましまして、進みて奥羽に臨幸ましまし給う。偶々、佐野王命の急使、皇太子（五瀬命）の変事を以聞す。神皇、大いに驚き、即時龍船を発せられ、漸く伊瀬崎の多気の宮に着御ましましき。然れども賊の大軍遮り戦うを以て、是より西国に巡幸ましますこと能わず。（中略）

會々、六皇子高倉王命は武佐志より軍船にて伊瀬崎の多気の宮に着し、神皇を守護し奉る。然るに賊勢日に加わり威力益々熾（さかん）なり。（中略）然るに東国の軍兵、漸次海上を渡り赴き会せしを以て、此の宮を度会の宮（わたらいのみや）と名付けたまう。ここに於いて四皇子日高佐野王命を立てて皇太子となし、高倉王命を勅使として、其の宣旨を奉して之を伝えしめ給う。（中略）

即ち、久真野口より進軍することに決す。（中略）伊瀬口の官軍は、伊瀬崎より山を越して沢又沢に攻め入り、勝ちに乗じて進む。賊軍連戦皆敗れ走る。神皇大いに懌（よろこ）び賀して、伊賀谷と名つけ給い、それより進みて山背谷にそ攻め入りける。然るに賊軍俄に大挙して来たり攻む。我軍利あらず。退いて宇治川の東に止り、川に拠りて之を防ぐ。賊、川を渡り来り攻む。（中略）神皇、偶々身例ならず。百方治術を盡し奉るも効なく、七日にして暴（にわか）に陣中に於いて神避りましぬ。（中略）伊瀬の山田の会野山の陵に葬る。　『宮下文書』

神武天皇の父（神皇）は伊瀬（伊勢）の度会に行宮（かりみや）を建てて居し、伊瀬口（伊勢）より伊賀へ進軍している。伊勢が神皇の本拠地である。死去すると伊勢に埋葬されている。

神皇は伊都国王である。伊都国は伊勢である。神皇は伊都国から三重県の伊勢へ移り、伊都国を再興したのであろう。そこを伊瀬＝伊勢（伊都国）と名付けたのである。

伊都国の隣に斯馬国（しまこく）がある。伊都・斯馬であり、伊勢・志摩である。斯馬（志摩）の人々も神皇とともに三重県の志摩地方へ移ったのであろう。志摩も斯馬から付けられた地名である。今の「伊勢・志摩」は伊都国・斯馬国の人々が移住して付けた名前である。

(4) 伊都国東遷の時期

神武東征の出発の時期は２５０－２６５年である。ところが父の神皇が神武天皇より先に伊都国を出発している。

２４７年ころに卑弥呼が死去し、その後男王が立ち「国中は不服」とある。伊都国は邪馬壹国に反逆する（「相誅殺」）が、また邪馬壹国の勝利に終わる。伊都国王である神皇は新しい土地を求めて出発する。２５０－２５５年ころであろう。神皇は斯馬（志摩）の人々も連れて行く。こうして三重県に「伊勢・志摩」ができる。

その後、皇太子の五瀬命が中心となり、いわゆる「神武東征」に出る。伊都国の人口は「戸萬餘」から「千餘戸」に激減する。伊都国の９割が国を捨てて伊勢・志摩や大和へ移る。「伊都国の東遷」である。伊都国の東遷は２回行われた。

□伊都国の東遷

■第１回　神皇（伊都国王）の出発　（伊勢・志摩へ）
２５０－２５５年ころ

■第２回　五瀬命・神武天皇の出発　（神武東征、大和へ）
２５５－２６５年ころ

第５章　「東征」の証明（遺跡より）

1　珍彦と西新町遺跡

(1) 珍彦と速吸之門

神武天皇は東征に出るとすぐに速吸之門に至り、珍彦（うずひこ）に出会う。

> 天皇、親ら諸皇子・舟師を帥いて東征す。速吸之門に至る。時に一漁人有り。（中略）名は珍彦という。曲浦で魚を釣る。天神の子が来ると聞いて迎え奉る。（天皇）又問うて曰く、「汝は能（よ）く我が為に導くや」。対えて曰く、「導きたてまつらむ」。（中略）以て海導者と為す。　『紀』

珍彦を「海導者と為す」とある。珍彦は海道の案内者になっている。『記』の方も次のように書いている。

> 又問う、「汝は海道を知れりや」。答えて曰く、「能（よ）く知れり」と。　『記』

珍彦は海道をよく知っていると答えている。「海道」とは九州を出発して瀬戸内海を通り、大阪（日下）へ行く「海上の道」のことである。珍彦はこの海道をよく知っているという。

(2) 西新町遺跡

西新町遺跡は福岡市早良区西新にある。

『史淵』第１２０輯（昭和５８年九州大学文学部）所収の「古墳時代初頭前後の筑前地方」の中で田崎博之氏は西新町遺跡について次のように述べている。

○西新町遺跡（福岡市早良区西新）

- 古砂丘の上にある。背後は沖積平野の氾濫原である。水田経営には不向きな土地である。
- 大阪湾沿岸を中心として分布する飯蛸壺の出土、近畿地方系統土器、中国中部地方系統土器、山陽東部地方系統土器、朝鮮半島の陶質土器などの外来の各系統の土器が大量にかつ恒常的にみられることから漁労活動を媒体とする広範囲な海上交流が存在したと考えられる。

西新町遺跡は水田には不向きな土地であり、漁労活動を媒体とする広範囲な海上交流が行われたであろうという。

珍彦は釣りをしている。漁労生活者であろう。しかも神武天皇に「海道をよく知っている」と答えている。

珍彦は「速吸之門」で釣りをしている。速吸之門の近くに住んでいるのであろう。西新町遺跡の北に「速吸之門」がある。珍彦は西新町遺跡の住人ではないだろうか。西新町遺跡は庄内式併行期の遺跡である。神武東征の時期も庄内式期である。時期もよく合っている。神武東征の案内役をしたのは伊都国の近くにある西新町遺跡の人ではないだろうか。

図 16　西新町遺跡と速吸之門

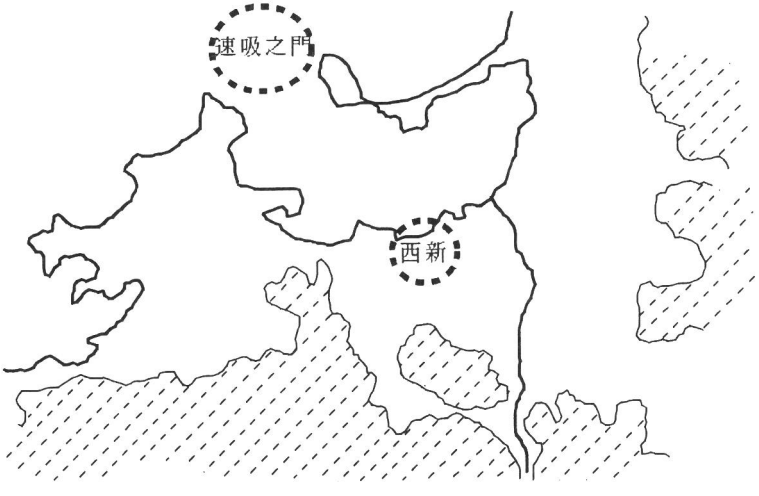


図 16　西新町遺跡と速吸之門

2　見田・大沢古墳

(1) 宇陀と見田大沢古墳

奈良県宇陀郡菟田野町に見田・大沢古墳群がある。奈良県立橿原考古学研究所編『見田・大沢古墳群』（奈良県史跡名勝天然記念物　調査報告第４４冊）には見田・大沢古墳群の「遺跡の環境」について次のように書いている。

□見田・大沢古墳群　（奈良県宇陀郡菟田野町）

■菟田野町は宇陀郡の南部にあり、昭和３１年４月宇太町と宇賀志村が合併して生まれた町である。

■八咫烏伝承…この地域の遺跡を述べる前に著名な八咫烏（やたがらす）伝承についてふれておきたい。『続日本紀』慶雲２年（７０５）９月丙午には「八咫烏の社を大倭国宇陀郡に置き、これを祭る」とあり、神武天皇の軍は八咫烏に導かれて宇賀志に入って来たという伝承はその頃より伝えられていたと考えられる。（中略）この伝承にみえる宇迦斯（うかし）は菟田野町の大字宇賀志と同じである。

神武天皇は宇迦斯（宇賀志）で兄宇迦斯を伐っている。見田大沢古墳群はその近くにある。

見田・大沢古墳群は５つの古墳からなる。その中の４号墳について次のように書いている。

□見田・大沢４号墳

○墳丘

■尾根の上に造営されている。

■東西・南北とも約１７mの方墳であろう。

■埋葬施設…割竹形木棺

全長２.９６、北端の幅６４ｃｍ、中央部の幅８２ｃｍ、南端の幅７７ｃｍ

○遺物出土状況

■棺内の位置から壺、剣、玉類、鏡が出土した。

■鏡の周囲には四角にうすこげ茶色の土があり、その内側には鏡と同心円状に黒色有機物があった。鏡をとりあげたところ、この黒色有機物は鏡の下面にも残っていてその有機物の目の方向は棺の長辺の方向と全く

同じである。鏡の両面に残っていた黒色の有機物は棺内に敷かれたものの可能性が強い。

■また鏡背と木棺材状の黒色有機物の間には緑色に変化した絹が付着していた。

■棺の中央部から北にかけての棺底で、うすく赤色顔料が認められた。（中略）この赤色顔料を化学分析したところ辰砂であることが明らかとなっている。

■ヤリガンナは墓壙の西側中央部の墓壙埋土の中より出土している。「く」の字に折れ曲がって出土した。

○遺物

■鏡１、玉類８、土師器壺１、ヤリガンナ１

■鏡…四獣形鏡、面径９.５ｃｍ

■勾玉…翡翠、２.７ｃｍ

○墳丘出土土器

■壺形土器

二重口縁壺の破片…風化が著しいが外面に櫛描き波状文を描き、円形浮文を加えた文様構成が認められる。赤褐色を呈し、石英を中心とする砂粒を多く含む。

■器台形土器

小型の器台である。

(2) 見田・大沢４号墳の年代

見田・大沢４号墳の年代は報告書の中でも意見が分かれている。そこで１９９８年７月に寺沢薫氏に最近のお考えを聞いた。

今の編年でいえば、土器からは庄内３式ー布留０式でしょう。全体を考えると布留０式だと思っております。（寺沢薫氏）

庄内３式に近い布留０式であろう。布留０式の始まりは２８０年頃である。見田・大沢４号墳の年代は２８０年ー２９０年頃とみてよいであろう。

神武東征は２５５年ー２６５年頃に出発し、かなりの年月を費やして宇陀へ来ている。宇陀へ来る時期は２６０ー２７０年ころであろう。その後、被葬者が死去し、墓が造られる。見田・大沢４号墳の年代は神武東征の時期に合っている。

(3) 三種の神器と絹織物

見田・大沢４号墳からは三種の神器が出土している。三種の神器は伊都国の伝統的な祭器である。見田・大沢古墳群は、兄宇迦斯を伐った後に「宇賀志」の地に住み着いた伊都国の人の墓ではないだろうか。

鏡に付着して絹が出土している。弥生時代に絹があるのは北部九州だけである。近畿地方からは弥生時代の絹は出土していない。この報告書で角山幸洋氏は「４号墳四獣形鏡付着の絹帛」についてと題して、次のように述べている。

出土時期から、直接比較し得るものはないが、前期古墳出土のものは、天理・天神山古墳出土の絹帛が織物組織・密度ともに同一形式をとるものであり、同技法による織物生産の上限をさかのぼらせることができる。北九州出土の絹帛と同一時限で比較することは地域差もあり誤解を招きやすいが、良質の絹帛を生産する畿内の先進性が推測されるようである。

角山氏はこのように述べて、見田・大沢４号墳出土の絹は畿内の先進性を示すものであるとしている。

しかし弥生時代の近畿地方には絹はない。弥生時代終末になって突然、見田・大沢４号墳から出土している。「出土時期から、（近畿地方には）直接比較し得るものはないが、」と述べているのは他にこの時期の絹がないからである。見田・大沢４号墳から出土した絹は近畿地方から出土したもっとも早い時期の絹である。

この絹は神武東征の時に伊都国から持ってきたものであろう。大切な鏡を包んできたと思われる。

3　メスリ山古墳と大久米命

(1) 大久米命

大久米命は神武東征で大活躍をする。『紀』は次のように書いている。

> ここに大伴連等の祖、道臣命（みちおみのみこと）、久米直等の祖、大久米命の二人、兄宇迦斯を召し、罵詈（ののし）りて云う、（中略）追い入れるとき、己が作った押し機に打たれて死ぬ。　『記』

大久米命は道臣命とともに兄宇迦斯を伐っている。さらに「久米歌」がある。

- 忍坂の　大室屋に　人多に　来入る居り　人多に　入り居りとも　みつみつし　久米の子が　頭椎　石椎もち　撃ちてし止まむ　（略）
- みつみつし　久米の子等が　粟生には　（中略）撃ちてし止まむ
- みつみつし　久米の子等が　垣下に　（中略）撃ちてし止まむ

「久米の子等が、……撃ちてし止まむ」とある。久米の子等が進撃する時の歌であろう。大久米命は軍事を司る将軍であろうと思われる。

大久米命は神武天皇が大和に入り、新しい皇后を選定するときにも活躍する。

> 故、日向に座（いま）すとき、阿多の小椅（おばし）の妹、名は阿比良比売を娶りて生む子は多芸志美美命、次に岐須美美命の二柱座しき。
> 然るに更に大后と為す美人を求めるとき、大久米命曰く、「ここに媛女（おとめ）有り。……」という。　『記』

大久米命は大和で神武天皇の后を探して推薦している。

『宮下文書』は大久米命を「皇弟大久米王命」と書いている。「皇弟」とは神武天皇の父（神皇）の弟である。大久米命は神武天皇の叔父にあたる。『宮下文書』は大久米命の活躍を次のように書いている。（皇太子は神武天皇）

- 大久米王命は遠久見より軍兵を率いて伊瀬の度会の行宮に着し給う。神皇詔して、更に佐野の行宮に赴き救わしめ給う。（中略）則ち、軍議を行宮に開きぬ。即ち、久真野口より進軍することに決す。
- 皇太子、親ら大久米命・手研耳命・中臣道之臣命以下二十二将を率いて、宇陀の国見に向かい、賊魁長髄彦を征しまさむとし、（略）
- 皇太子は大久米命等と共に、皇軍を率いて進みます。
- 皇太子は大久米命と大挙して賊魁長髄彦を国見山に攻む。
- ここに於いて、賊軍ことごとく言向和平（ことむけやわ）しぬ。乃ち、皇太子初め、大久米命外三十八将、振旅して日高宮に凱旋ましましき。

『宮下文書』

大久米命はいつも神武天皇のそばにいて神武天皇を助けている。后の候補を探しているのも神武天皇の叔父だからであろう。

(2) 大久米命の居所

東征を終えると神武天皇は畝傍山に都を定めて論功行賞を行う。

> 二年春二月、天皇、功を定め賞を行う。道臣命に宅地を賜いて、築坂邑に居さしむ。以てことのほか寵す。
> 亦大来目を畝傍山の西の川辺の地に居させしむ。今、来目邑と号するのはこれその縁（ことのもと）なり。　『紀』

大来目（大久米命）は「畝傍山の西の川辺の地」を賜ったとある。畝傍山は鳥見山である。鳥見山の西の川は寺川であろう。その川辺の地を賜っている。

図 17　鳥見山と寺川

(3) メスリ山古墳

寺川の西にメスリ山古墳がある。『探訪　日本の古墳　西日本編』（有斐閣選書）は次のように書いている。

□メスリ山古墳

> 奈良県櫻井市大字高田小字メスリに所在する前方後円墳である。安倍山の南で破裂山の尾根がのびてきて切れている部分に存在している。
> 図 18　鳥見山、寺川とメスリ山古墳

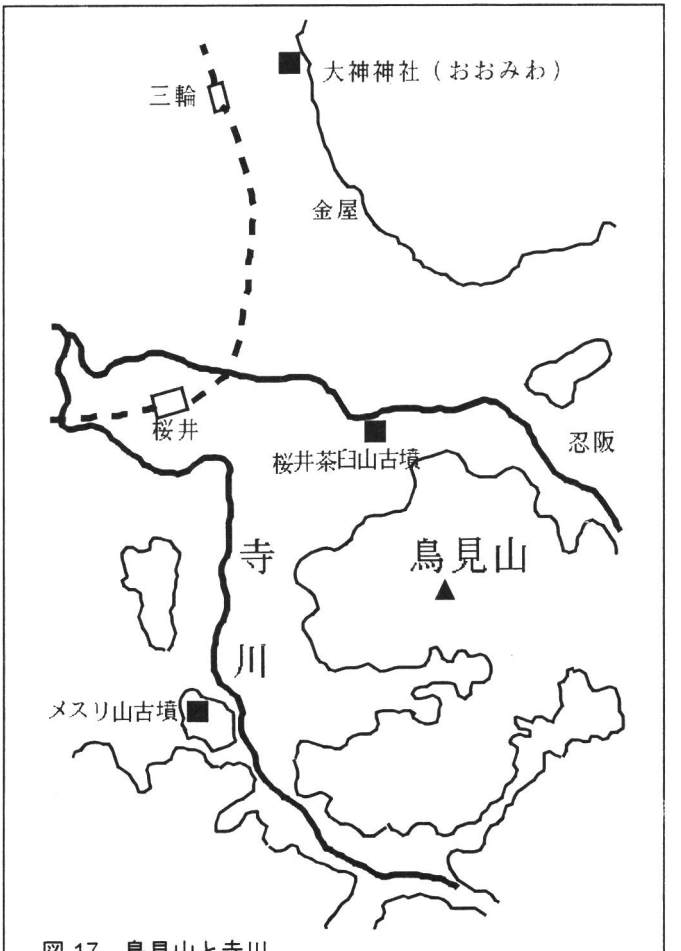
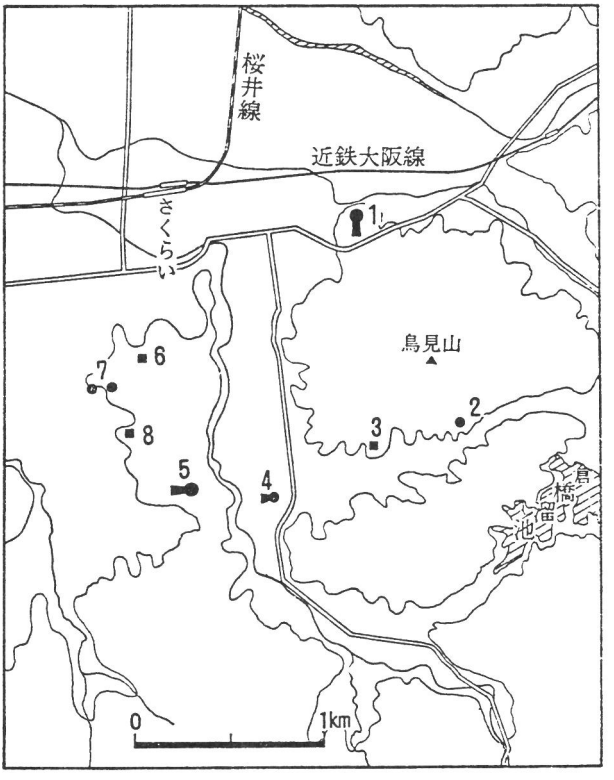


図 17　鳥見山と寺川



桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳と周辺の遺跡
（1 茶臼山古墳，2 舞谷古墳，3 秋殿古墳，4 兜塚古墳，5 メスリ山古墳，6 艸墓古墳，7 安倍文珠院古墳(西・東)，8 谷首古墳）

図 18　鳥見山、寺川とメスリ山古墳

○墳丘と埴輪

■全長２２４ｍ、後円部径１２８ｍ、前方部幅８０ｍ

■三段築成、柄鏡式の前期古墳の特徴を備えた墳形

■葺石…前方部は全部除去されているが、後円部では随所で現在も観察することができる。

■円筒埴輪列は段築の縁辺部に樹立されていた模様である。

■墳頂部中央の主体部を囲んで二重方格状に埴輪が並べてあった。（中略）これほど華麗な埴輪配列をとる古墳はまだ例をみない。

■埴輪は超大型であり、最大のものは直径９０ｃｍ、高さ２.４２ｍ。

■二重列の内側のものは特殊円筒埴輪（器台形）と高杯形埴輪。

○石室

■埴輪列の下に埋葬施設が存在。

■竪穴式石室

長さ約８ｍ、幅１.１４－１.３５ｍ、高さ南側１.７６ｍ

○副室

■石室の東側に並列して副室が存在。

長さ６ｍ、幅７０－７２ｃｍ

■側壁を合掌形に持ち送る構造。石室上面は扁平な板石で覆っている。

■副室は二重方格の埴輪列の直下にある。

○主室の副葬品

■玉・石製品

硬玉製勾玉６、碧玉製管玉５５、鍬形石破片３、石釧破片２９、車輪石破片１、椅子形石製品破片３、櫛形石製品破片３、石製合子片６、棒状石製品１

■銅鏡類　　（内行花文鏡、神獣鏡片）

■武器類　　（鉄刀、鉄剣破片）

○副室の副葬品

■副室は副葬品格納用の施設であり、遺骸の埋納はなかった。

■碧玉製石製品

翼状飾付石製品、鉄芯付翼状飾付石製品、十字形翼状飾付石製品、筒形石製品、鉄芯付紡錘車形石製品、紡錘車形石製品、管玉状石製品１９

■武器類

鉄製弓・矢、銅製弭（ゆづか）、銅鏃２３６、石製鏃５０、鑓先２１２以上、鉄刀、剣１

■鉄製工具類

■斧頭１４、手鎌１９、ノミ３、ヤリガンナ５１、刀子４５、用途不明鉄製品１９、鋸１

□大量の武器類が埋納されていたことが注目される。

○メスリ山古墳の特徴および問題点

①磐余と推定される地域にある。

②円筒形埴輪・特殊器台形の発展ともいうべき特殊円筒埴輪・高杯形埴輪の存在すること。

③埋葬施設で、石積みの特殊墓壙の存在。上下二重構造。主室と副室の高低の位置関係など、寿陵関係考察の重要資料にもなるであろう。

副室の構造は板石の大石を天井に架構しない合掌造りの側壁持送りの形状をもつもので、石室築造技術上の一つの問題であろう。

④副葬品では、椅子形石製品や櫛形石製品など、石製品のなかでも類例の少ないものである。

副室からは、鉄製弓・矢、銅製弭（ゆづか）など例をみない遺物が検出されている。

弭については、日本・韓国を通じて出土例がなく、その伝来経路などにも注目しなければならない。

玉杖用の石製品も桜井茶臼山古墳出土例などと関連させてその出土状況などから再考しなければならない。

■銅鏃２３６、鉄製ヤリ先２１２以上という膨大な量にのぼる武器や、その他の工具類など、量と内容において古墳被葬者の性格を考えるうえで重要な意味をもつ。

■メスリ山古墳のような武器量は司祭的な性格よりも武力による権力者といった感じが深くなる。

このように書いている。メスリ山古墳は寺川の西にあり、大久米命が拝領した土地にある。大久米命は東征の時の将軍である。メスリ山古墳からは武器類が数多く出土している。将軍の墓を思わせる。大久米命の墓にふさわしい。

玉杖の石製品が出土しているのも神皇（伊都国王）の弟だからであろう。三種の神器が出土しているのも伊都国の人の墓であることを示している。

メスリ山古墳は丘尾切断の柄鏡式である。神武天皇の墓である桜井茶臼山古墳と同じ作りである。墓の造りから見ても神武天皇と近い関係にある人の墓といえる。メスリ山古墳は大久米命の墓であろう。

ただしメスリ山古墳の方が桜井茶臼山古墳よりも時期的に新しいといわれている。大久米命は神皇の弟であり、神武天皇の叔父にあたるから神武天皇よりも早く死去しているはずである。大久米命の墓の方が神武天皇陵（桜井茶臼山古墳）よりも古くなければならない。

メスリ山古墳の方が新しいのであるから大久米命の子孫の墓かもしれない。あるいは大久米命の死後、かなり後になって大久米命の墓を築造したのかもしれない。